



Contents

- LoFR オープンレクチャー「時代に対応する図書館とは何か」のご案内
- 研究所 TOPICS
- 英語多読における公共図書館への期待／江竜 珠緒
- 公共図書館での資料への自由なアクセス／永田 治樹 (Library Compass 第8回)



開催決定 未来の図書館 研究所 オープンレクチャー (LoFR Open Lecture)のご案内

参加費
無料

時代に対応する図書館とは何か

ーアメリカの実践から考える

講演者 **豊田 恭子** 氏 (北海学園大学非常勤講師)



1990年代半ば、インターネットが登場し、時代がアナログからデジタルに大きく舵を切ろうとした時、アメリカの図書館界はそれに呼応すべく、図書館サービス法を改正し、新時代における新たな図書館の役割を再定義した。社会の分断が叫ばれる昨今においては、地域の再建者としての活動を強化すべく、今また新ビジョンのもとに日々奮戦している。社会ニーズを積極的に取り込んでいこうとするこうした姿勢は、人々の図書館への評価を高め、予算を増やす成果につながった。こうした実践から私たちが学べることは何なのか。今日の日本の図書館界が抱える課題を解決するヒントを得ることはできないか。参加者との議論も交えながら、考えてみたい。

◀ 本講演に関連する書籍『闘う図書館：アメリカのライブラリアンシップ』（筑摩選書）発売中です

日時 2023年7月21日(金) 14:00~15:30 **定員** 50名 (先着順・事前申込制)

開催方法 Web会議サービス (Zoom) によるオンライン開催のみとし、会場での開催は行いません。

お申込み 申込フォーム <https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/lecture/202307/> または、右記 QR コードからお申込みください。※参加申込受付は当日 11:00 まで。



研究所 TOPICS



■ 「令和4年度世田谷区立図書館マネジメント能力向上研修」の講師を担当しました

2023年1~2月に全2回で開催されました、世田谷区立図書館の館長向け研修の講師を、副所長の戸田が担当いたしました。区立図書館の現状についてのSWOT(S:強み, W:弱み, O:機会, T:脅威)分析や、他自治体の事例調査などを経て、「S・Oを活かした新しい取組み」について考え、発表するグループワークを行いました。

■ 書籍『図書館とコミュニティアセット(未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2022, 第6号)』を発行しました

2023年5月に、今号も引き続き書籍として樹村房より発売しています。未来の図書館研究所主催シンポジウム「図書館とコミュニティアセット」記録のほか、地域・コミュニティの人々の記憶を収集し記録する取組みや、関連する論考をとりまとめました。詳細・ご購入については、右記QRコード、または樹村房Webサイトをご覧ください。

ISBN978-4-88367-381-0 ▶ https://www.jusonbo.co.jp/books/290_index_detail.php



英語多読における公共図書館への期待

江竜 珠緒(明治大学付属明治高等学校中学校 司書教諭)

◆はじめに

かんたんな英語で書かれた本を大量に読む「多読」が広がりつつある。個人の実施では金銭的な負担が大きいため、『図書館多読への招待』¹⁾をはじめ、利用者側からの公共図書館に英語の本を! という声も増えてきた。一方で、図書館側としては予算や排架場所、そもそも排架したところで利用者が少ないのではという懸念から、なかなか実施に踏み切れない場合もあるようである。

私立の中学校、高等学校図書館で英語多読本を排架し、英語科教諭とともに英語多読指導を推進して10年以上になる。この間、多くの学校図書館、公共図書館の方々と話をしてきて、自分なりに考えることがあった。そこで今回は中学校、高等学校の立場から、公共図書館への期待を述べてみたい。「多読」では日本語の本の多読も含まれるため、ここでは「英語多読」という語を用いる。

◆英語多読とは

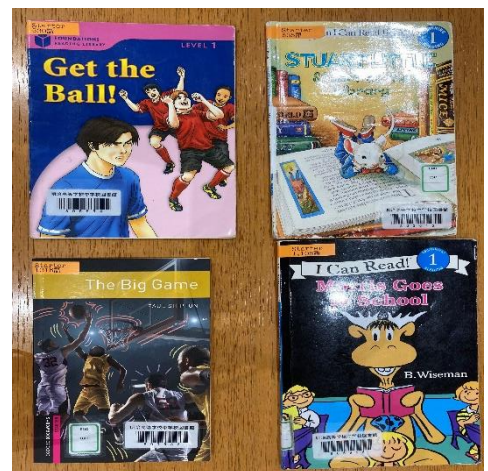
そもそも英語多読(Extensive Reading)とは、じゅうぶんに英語力を身につけた「読書=趣味」という人が娯楽や教養のためにディケンズやオースティンを読むようなことは意味しない。英語の語彙力や文法力、読解力に欠けている人が、たくさんやさしい英語の本を読んで、語彙や文法、読解力などの「英語力」を身につけようとする試みこそが、英語多読である。

複数の英語多読指導者や実践者が集まると、英語多読が学習なのか読書なのかということが軽い議論になることがある。しかしこれは議論するようなことではなく、学習としての英語多読も読書としての英語多読もあるのだとしたほうが良いと考えている。英語多読をやってみようとする人の中には、語彙力や文法力を定着させることができ、英検やTOEIC取得点の向上につながるのなら英語多読(学習)に取り組んでみたいと考えている方々と、楽しみながら英語の本を読んでいるだけでいつか長編が読めるようになるならすごいなあと思いつつ英語多読(読書)をする方々がいるからである。中学校や高等学校で実施する英語多読においては、1冊の中に平均10回以上同じ語が繰り返されているような学習用のGraded Readers(GR)を何冊も読めば単語帳をめくるよりも語彙の定着を図れると考えて英語多読学習を実施するため、正確な読解を可能にする難易度の本を読むこ

とを重視する。一方、学校以外の場で英語多読に取り組む方々はどちらかといえば英語多読読書の傾向があり、完璧に理解するというよりもイラストに助けられながらざっくり物語の筋をつかんで楽しめる本を読むことを重視している印象がある。

つまり、ひとくちに英語多読といっても、どのような目的の人たちを対象にするかによって、排架する本は異なってくる。もしじゅうぶんに予算があるのであれば、文字のほとんどない絵本からGRはもちろんネイティブ向けの本までまんべんなく揃えることが可能で、英語多読学習に取り組みたい人にも、英語多読読書を楽しみたい人にも、さらには英語での読書を趣味としている人にも満足できる書架を作ることができる。しかし、それが不可能であるならば、最終的にはすべての人々が満足できる幅広い難易度やジャンルの英語多読本を揃えるにしても、導入段階では対象者を絞って英語多読本の選書をするのが現実的だと考えられる。

このことについて公共図書館の方とお話をすると、「公共図書館なのに優先的に揃えるレベル(難易度)があっていいのか悩む」「そもそも学習用のテキストを入れていいのかという悩みがあるのでGRを入れていい」という声を耳にする。海外在住経験が長く英語の本を読み続けたいと思っている人を除外したとしても、英語多読にどのような期待を抱いている人を対象にするのか(対象者を限定していいのか)は確かに非常に悩ましいことであるだろう。



▲ 左側のGRのほうが右側の児童書よりも難易度が低い(語彙、文法ともに)

◆英語多読本セットの団体貸出

そこで提案である。英語多読の導入段階においては、開架に並べる英語多読本ではなく、学校に向けて英語多読本のセットを作ってみてはどうだろう。これまで学校への団体貸出として学年別であったり、テーマ別であったり、学習用の知識本セットを作成したりしていたのと同様のことを、英語多読本で実施することはできないだろうか。

対象は中学 3 年次生以上（中学校または高等学校）。ベネッセ教育総合研究所の「高 1 生の英語学習に関する調査〈2015-2019 継続調査〉」²⁾では、全国 971 名の高校 1 年次生のうち、538 名（55.4%）の生徒が、英語が「とても苦手」「やや苦手」と回答している。複数の研究者が中学 3 年次に使用する英語教科書と高校 1 年次に使用する英語教科書の難易度幅が広いことを指摘しており^{3),4),5)}、中学校と高等学校で使用する英語教科書における単語数や単語の難易度幅の広さが、英語嫌いの高校生を生む要因となっている可能性がある。中学 3 年次のうちに語彙数を増やしておくか、高校 1 年次のはじめに不足している語彙数を増やし、その後 3 年間英語多読を継続するか。中学 3 年次と高校 1 年次で使用する英語多読本の難易度は異なるが、いずれにせよこの時期にインプット量を増加させる英語多読本を読むことの意義は高い。それがわかっていても英語多読に取り組めない、学校図書館予算では英語多読本が買えないという学校に対して英語多読本の団体貸出セットが用意されていたら、英語科教諭にとっての強力な支援となる。

学校向け団体貸出のために準備する英語多読本の最低限の必要冊数は、仮に 1 クラス 30 人であれば、難易度の低い総語数 500 語の本を 60 冊、プラス 10 冊程度の 70 冊。これは授業中の 10 分間×3 回/週、英語多読を実施すると仮定した場合である。週 3,000 語は年間約 10 万語。理想的な英語多読としては少ないが、中学校英語教科書の平均総語数は 4,000~7,000 語弱であるため⁶⁾、教科書と並行しての英語多読であれば英語力の向上が見込めるインプット量である。10 分間の確保が困難であるなら、5 分×3 回/週でも年間約 5 万語。何もしないよりは断然ましである。

異なるタイトル 70 冊のセットを 3 種類、学校数分作る（地域に 7 校あるなら、A、B セットをそれぞれ 2 つと C セット 3 つで 7 校分）。年度はじめに各校 1 セットを配送して、それを学期ごと交換すれば、十分に授業が成立する。高等学校において複数学年で実施する場合や、1 学年を複数教員で同時授業展開している場合にだけ複数セットの貸出となるが、それでも 1 校 3 セット以上の貸出になることはまずないだろう。

長期休み中には団体貸出図書を回収して館内閲覧ができるようにしてあげればなおよい。これまで公共図書館をあまり利用してこなかった中高生が英語多読を継続するために図書館を訪れ、生涯学習の場としての公共図書館を認識する良い機会にもなる。英語多読をしている中高生の姿を見て、自ら取り組もうとする一般の方々もいるだろう。おそらく 1 セットを作るための予算は 5~6 万円程度。学校への英語多読本の団体貸出は、対象者や難易度を限定することのジレンマに悩みながら借りるか借りられないか不明な英語多読本を排架するよりも金銭的にも安くすみ、さらには潜在的利用者の開拓にもつながる一石二鳥の試みになる可能性がある。

◆おわりに

世間一般で考えられている以上に、学校において中高生の英語力向上は喫緊の課題とされている。「大人になったら英語なんて使わないし」と言い訳のできる状況ではなく、「将来仕事で英語以外の言語も必要になるけど、とりあえず最低限英語くらいはできるようにしておかない」という状況にあるのが現在の子どもたちだ。英語力向上のためのインプット量増加の重要性を認識しつつ、英語多読本がないために英語多読を実行できない英語科教諭も多くいる。そのような教諭や生徒を支援するために、公共図書館の協力をぜひお願いしたい。

今回は字数の関係で、中高生に必要な難易度についてまで詳細に述べることはしなかったが、機会があれば、団体貸出のために必要なセット本の選書方法についても示し、公共図書館の方々とぜひ前向きな議論を交わしたい。

<注・参考文献>

1. 酒井邦秀、西澤一編著。図書館多読への招待。日本図書館協会、2014、ix、186p。
2. ベネッセ教育総合研究所。「高 1 生の英語学習に関する調査〈2015-2019 継続調査〉」。 <https://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=5467>。（参照 2023-05-26）。
3. 及川賢。検定教科書（外国語科（英語））を通して見た中高間のギャップ。埼玉大学紀要教育学部。2007、vol.56、no.2、p.73-80。
4. 根岸雅史。Lexile Measure による中高大の英語教科書のテキスト難易度の研究。ARCLE REVIEW。2015、vol.9、p.11-12。
5. 大田悦子。Lexile Measure を用いた中高英語教科書の難易度比較。白山英米文学。2016、no.41、p.13。
6. 村岡亮子。中学校検定教科書で学習される語彙、学習されない語彙：延べ語数、異なり語数、語彙レンジの視点から。STEP BULLETIN。2010、第 22 回 研究助成、p.187。

